

アコンカグア、再び

diciembre 2003～enero 2004 con Pancho



(小オルコネス氷河から仰ぐアコンカグア南峰南壁)

昨年と同様、今回もまたアンデスの神は微笑まなかったが、それなりに楽しい山旅となった。

昨年メンドーサの宿でお世話になった増田四郎さんが来日され、2003年4月から9月まで静岡のお宅に滞在された。アコンカグアで一緒だった春日井山岳会隊の皆さんや単独行の群馬大学のT君とそのフィアンセなどが集まって同窓会をやったり、また都岳連の個人会員研修会でアコンカグアの講演をして頂いたりして旧交を温めることができて楽しかった。色々と話をしている内に、冗談の積もりであったアコンカグア再訪がいつの間にか本気になってしまった次第である。

しかし、連続して2回も旦那だけで1ヶ月間も遊びに行くのも気が引ける。増田さんから今度は両方の奥さんも是非ご一緒にと勧められていたので、大蔵大臣ご同道なら、これは誰に遠慮気兼ねも要らないと大いに期待したのであるが、我が山の神は「エコノミー症候群になるから、40時間もかかる地球の真裏までは行けないワ」とノタマツタ。それではトランスファーのNYまで一緒に行ってNYで遊んできたなら如何かと水を向けて儂い夢に期待を掛けてみたのであるが、今度はパンチョの山の神が「ワタシは据え膳上げ膳の大名旅行でないとイヤよ」と仰せられた。

仕方ない。2回目ともなると、山の神の手前、多少は旅費節約の努力も見せなければならない。アメリカからアルゼンチンまでの航空券は格安があると聞いていたので、早々と8月頃にNYの知り合いに頼んでみたが、時期が早過ぎたのか該当する切符はなかった。たまたまインターネットで見たアクロス・トラベルという秘境専門の店に格安があるとのことで、ここで手配。今回は途中泊はせずに、NY、ブエノスアイレス経由でメンドーサに直行としたから、飛行機代は往復16万円ほどで済んだ。

昨年は初回であったから登路の研究もじっくりやって行ったのであるが、今回は下山後のパタゴニア旅行やメンドーサでの遊びの計画に現を抜かして登山そのものの計画はどこかエエコロ加減であったことが、アンデスの神様のご機嫌を損ねた結果に繋がったのかも知れない(と今になって反省をイタシしているところである)。

さて。

丁度1年前の前回は、高度障害の肺水腫に苦しみ5,300mでリタイア、今回は高度馴化に万全を期し

た結果、高度順応に関しては満点であったが思わぬ所に罠があった。やはり標高 7,000m の山は、我々のようなロートルでしかも「何が何でも必ず登頂を」という執念に乏しいフマジメな輩にはそう易々と登らせてくれないらしい。

前回と同じく相棒のパンチョと二人の弥次喜多道中で 2003 年 12 月中旬入山。“パンチョ”とは、私の半世紀来の学友・岳友・楽（呑）友で、ドンキホーテの騎士行脚にのろまなラバのロシナンテと共に従った家来サンチョ・パンサのどこか間抜けで些か笑えてしかも憐憫の情を興こさせる風貌に敬意を表して私が奉った名前である（主人公のドンキホーテは勿論この私である）。スペイン語圏では“Pancho”というのは Francisco の別名であるから尊い聖人の名前でもあり、最大級の尊称と言えないこともない。確か、わが朝の古事記にも“蠻猪”ノ宿彌というエライ豪傑が登場したと記憶しているが、我がパンチョもこのくらいの人物に匹敵するのではないか。とは言うものの、“pancho”というスペイン語にはホット・ドッグという意味もあり、最近とみに広くなってきた彼の額は後者にも似ているから、人物の解釈というものは事程左様に複雑であり、余人は予断で判断してはいけないのでアール。

さて、2004 年の元旦にはアルゼンチンの広大なパンパから昇るアンデスの太陽神をアコンカグアの山頂で拝む筈であったが・・・。

トランスファーのニューヨークが大雪で出発が遅れ再乗り換え地のアルゼンチン・ブエノスアイレスの空港が変更になったり、今シーズンから始まった「アコンカグア遭難撲滅キャンペーン」によって BC でのドクター・チェックが厳しくなり（動脈血酸素飽和度が 60 台前半以下であれば聴診器による診察があり、肺水腫の疑いがあれば即刻下山勧告を強制される）、前回から顔馴染みになっていたレンジャー隊員から、この勧告を受けた幾つかの日本人パーティーへの通訳や説明や説得を依頼されて、一晩中添い寝で病状を監視したり、逆にこの勧告が不服で当局（州立公園局）の方針に憤懣やるかたない日本人から恨まれたり、今回はいろいろなことがあったが、何といても特記すべきは予想だにできなかった“罠”であった。

通常は入山第 1 日目のコンフルエンシア・キャンプ (3,300m) に 1~2 泊して高度順応し、ここから BC (プラサ・デ・ムーラス、4,300m) までの 8 時間行程は 1 日で登るのが普通であるが、我々は体力の温存と一層の高度馴化のために、途中のイバネス・キャンプサイト (3,960m) 付近で 1 泊して中継ぎすることにした。ここは真っ赤な泥水が流れているだけで（アコンカグアの谷はどこもレッドリバーバレー）飲料水は全く無い場所であるから、前日コンフルエンシアから高度順応を兼ねて 8割の水と食料、ガスボンベ、6,000m から上で使う高所防寒服などをテントの外張りに包んで河岸段丘の隅に積み石を積んでデポしておいた。



（イバネスで張ったテント。ここでデポが消えさせていた）

さて、翌日。イバネスに辿り着いてみると、河岸段丘の上にデポしておいた装備の包みがどこにも見当たらない。積み石も跡形なく消えている。鉄砲水で流されたか?!、強風で飛ばされたか?! デポした場所が分からなくなったか?! アコンカグアでは夏場には一滴の雨も降らないし、氷河が急に溶け出して洪水になるようなこともない。確かにこの谷は強風地帯ではあるが、デポを大きな石で囲み更に上にも沢山石を載せておいたから風で飛ばされた筈もない。ここは今までに何回も通い慣れた場所であるから地形を見間違えることもない。さては、このオルコネス谷に巣くうという大鼠?にでもやられたか。現地の人から、“昨日 BC に張られていたテントが翌日には街の登山用具店に並んでいる”から充分注意するようにとよく聞かされていたが、まさか我が身に降りかかるとは想像だにしていなかった。しかし、

無くなったものは仕方がない。不用意にデポした我々にも責任があるし、この国では置いてある物は何でも自由に持って行ってよいという慣習が昔あったとか今もあるとか。南米では珍しく治安が良いと言われているメンドーサでは、今回も前回も深夜の裏通りでも何の不安も感じなかったから多少気が緩んでいたのかもしれない。

しかし弱ったナア。たちまちの食料と水が全く無い。食料は1食や2食喰わなくても標高であと400mも登れば、ラバで荷揚げしておいた食料がBCにはどっさり届いている筈である。しかし高山病予防のためには水分は不可欠である。恥ずかしい話であるが、通りかかる下山者を誰彼なく捕まえて水やジュースや食料の残りを恵んで頂いた。あちこちのポケットを探した挙げ句、アメ玉がたった一つ残っていたとわざわざ引き返して届けてくれたアメリカ人、ザックの底をさんざん掻き回してグシャグシャに潰れたペットボトルに僅かに残っていたジュースをくれたドイツ人、後4時間も下れば食料や水が得られるコンフルエンシアだから食料や水は生憎何も持っていないと申し訳なさそうに謝っていたアルゼンチン人など、多くの異国の人々に心からお礼を申し上げたい(この件が運悪く高所のキャンプサイトで起きていたら、たぶん命に関わっていたであろうから、それだけでも幸運に感謝しなければならない)。

高度順応がうまくいったお蔭で、BCから上は順調に前進キャンプを進めて大晦日にキャンプ・ベルリン(5,800m、通常最終キャンプ)に幕営。翌元旦未明、頂上に向けて出発したが、外張りの無い一枚布のテントで過ごした5,800mの夜は寒かったし、高所服の無い身体は寒さに震え、手や足の感覚が全く無くなってきた。すぐ上に見える頂上をうらめしそうに見上げながら6,040mまで登った所で撤退を決意。

この事件が登頂の成否に影響しなかったといえば嘘になるが、登頂できなかったのはこの件だけに責任があるのではなく、根本的には“執念”の欠如と反省している次第である。アコンカグア唯一の英文ガイドブックであるSecorの『アコンカグア:登山ガイド』という本の高所医学(凍傷)の章に、「(身の丈に合わない無理をしてまで)アコンカグアの頂上に登頂するという行為は、たった指1本を失うことにも値しない・・・」と書かれているのを金科玉条にしている私であるから。(誤解のないようにお断りしておきたいが、アコンカグアにはノーマル・ルート以外に南壁などの極めて困難なルートが多数あり、ここで結果的に遭難死したり重い凍傷に罹ったりしたクライマーは数多い。引用部分はこのようなクライマーを非難している訳では決してないし、また壮絶な登攀行為を否定している訳でもない)。

さて、話を出発点に戻そう。成田からNYのJFKに着いたNW機は着陸はしたものの大雪のためにタクシングできず、スポットに入ったのは着陸後2時間も経ってからであった。JFKで乗り換えたアルゼンチン航空機も定時にスポットを離れたのであるが、積雪のために滑走路に出られず2時間も待たされた。この間一言のアナウンスも無いから、何が何やらサッパリである。左様な訳で、ブエノスアイレスのエセイサ国際空港への到着が遅れ、ここで乗り換える予定のメンドーサ行きの飛行機は既に出発した後であった。機内で客室アテンダントの婆さんに確認したら“*No problema, ese avión está esperando a pasajeros transbordandos*” (No problem, the flight will wait for the connecting passengers)と言っていたから、タカを括って外でタバコなどを吸ったりしてゆっくりと乗り換えのゲートに行ったのであるが・・・。(俄仕込みのスペイン語でのやり取りであったから、或いは小生の聴き間違いか、その場凌ぎのリップサービスであったかも知れない。前回は、スペイン語は数字の1から5迄をやっと覚えて行った程度で、日常会話は1語も解せなかったが、今回は事前にNHKラジオのスペイン語講座で勉強しておいたので、この程度の会話ならスラスラ?とできたのでア〜ル)。

しかし、流石にアルゼンチン航空はフラッグ・キャリアである。国内線専用空港であるアエロパルケからはメンドーサ行がまだ一便残っているから、そちらに振り替えるとバスでアエロパルケに送ってくれた。アエロパルケは昨年もイグアスの滝に行った時に通っているから様子は分かっているし、この空港はラ・プラタ川の河口に隣接しているので、お蔭で再び広大なラ・プラタ河口の泥水を見物することができた訳である。

メンドーサ空港まで車で迎えに来てくれていたスサーナさんとパブロ君に再会、増田農場に入る。今年の夏はメンドーサは冷夏だそうであるが、やはり日中は暑い。増田農場があるセントロ・ベルメッホ界隈の街路樹の緑陰や道端のバルなどの佇まいも懐かしかった。

ご主人の四郎さんと奥さんの久子さんが迎えて下さって、パブロ・ビールと夕食を頂きながら1年振りの世間話に花が咲いた。今年は登山客の出足が遅いそうで、我々が今シーズンの宿泊第1号である。同宿のパーティーはいないから離れを独占して、パブロ・ビール(当地アンデス印のセルベッサ〈スペイン語でビールの意〉)。パブロ君が経済の勉強を兼ねて管理している。ビール好きの我々のために冷蔵庫一杯に用意してあった)をジャンジャンと頂く。昨年同様、登山許可取得や現地での食料調達に3日間ほどを費やして、ウエルテル氏が運転する車でパンアメリカン・ハイウエーを飛ばし登山口のプエンテ・デル・インカに向かったのは12月18日の早朝であった。コンフルエンシアで2泊、翌日は前日デポしておいたイバネス泊まりであったが、ここで前述の事件が起きていたのである。



(←アコンカグア登山口。

左の白い山がアコンカグア

中央の岩山はマルセネス山)



(BC手前のオルコネス谷にあった

コロンビア小屋の廃屋⇒)

マア、何とかなつて予定どおりBCに到着。メンドーサでは今年は4月から8ヶ月間一滴の雨も降っていないようで、道中も昨年に比べて残雪が少なかった。イバネス付近に昨年は残っていたペニテンテス(氷柱、小セラック)も今年は影も形も無かった。

今回は前回の高度障害に凝りて、入山以後はセルベッサの誘惑にもひたすら耐え、タバコも金魚スタイルで吸い、腹式呼吸と吸吐2回式呼吸を心がけたせいか、BC到着時の動脈血酸素飽和度は79であった(平地では100が標準)。駐在ドクターも初日の数値にしてはvery goodだと褒めてくれた。パンチョは75であったから、野郎、隠れてセルベッサでも呑んだのではないか?

ロス・プキオス(荷揚げを頼んだラバ屋)のテントのすぐ下の昨年と全く同じ場所に、居間兼食堂用カマボコ、それぞれの個室テントの3張の天幕を張る。業者のテントも未だ少なかったから、やはり今年の出足が遅いのであろう。レンジャーの話でも本番は年が明けてからのようだった。話が逸れるが、「業者」といえば、ここではラバ屋やツアー屋のことを“company”という。入山点のオルコネス・レンジャー・ステーションで入山手続きをした際、“What’s your company”と聞かれて、我々は無職であるから、何と答えたら良いかと慌てたものであるが、恥ずかしい話ではあった。「業者」はしっかりmoneyを稼いでいるので、ちゃんと税金を徴収するのが我々の義務であると言っていた(ここまで税務当局が

出張して来ている。幾らで契約したかも聞かれた。我々が頼んでいるラバ屋のロス・プキオスは良心的なラバ屋で、そのBC支店に駐在している可愛いセニョリータのアドリアーナちゃんも昨年来からのミ・アミーガ(我がお友達)であるから、契約額の半分の値段を申告しておいた)。



(プラサ・デ・ムーラスのBC風景。右は我々のテント)

昨年は、食料は総てアルファ米の炊き込み飯一種類だけしか持参していなかったから、飯の楽しみが全く無かった。これに凝りて今回は、干し椎茸や高野豆腐、乾燥うどん、各種ラーメンなどを持参したのでBCでの飯はバラエティーに富んだものとなった。圧巻はパンチョ特製のお好み焼きで、乾燥桜エビ、乾燥イカや前回一緒だった春日井隊のネエちゃんが差し入れてくれた特製乾燥キャベツ、パンチョが沖縄で仕入れてきた乾燥ニガウリなどを混ぜたお好み焼きはなかなかの味で、たまたまBCで一緒になった北海道からの単独行氏(都岳連個人会員ホーム



(パンチョ特製のお好み焼き)

ページに掲載しておいた我々のアコンカグア情報を見て増田農場に宿泊)も舌鼓を打っていた。重いからよせと言っていたパンチョも、持参したマグロの醤油煮缶詰と現地調達 of 玉葱、桜エビと単独行氏に貰ったニンニク、沖縄産ニガウリを混ぜてアドリアーナに貰った酢で味付けした海鮮サラダ(?)にはぞっこんの惚れ込みようで、「これはイケル。名前を付けようぜ。“アコンカグア風マグロ・サラダ・にんにく・タマネギ添え”というのはどうじゃ」とのたまった。些か単細胞的命名ではあるが、小生は早速流暢なスペイン語で“ensalada a t una de soja con ajoy cebolla a la Aconcagua”と長い名前を奉ったものである。早速、アドリアーナにも教えて、ロス・プキオスの名物料理にでもして貰うか。発明者に敬意を表して最後に por Ohtsuka を加えて欲しいナ。(余談であるが、気圧が低いBCでは、うどんやラーメンは圧力鍋でないとはドロドロの糊になって喰えたものではない)。

BCでの高度馴化も順調で、BCから上に登れる目安である酸素飽和度85以上をキープできるようになった。顔馴染になった駐在ドクターやレンジャーから日本隊との通訳や交渉、高山病になった人の世話を依頼されたことは前に書いたが、これは小生の英語や片言のスペイン語が買われたというよりも、高度馴化模範囚としてであろう。

パンチョの顔を、前回お世話になったポーター達(彼は送り狼の類ではないかと疑っているが)が覚えていて、“Kawasaki!! ブルン、ブルン”とやっている。カワサキ・オートバイは彼の国でも有名だし、彼の独特な頭髪の風貌(失礼)には特徴があるから、すぐ名前を覚えて貰える(俺は「ホンダ」という名

前にでもなりたいヨ)。いつの間にかBC中の有名男になって「アコンカグア・マスター」というありがたい尊称まで頂戴する始末であった。

今回もBCでは何組かの日本隊に会った。前述の北海道の単独行氏(下山後増田農場で何日かご一緒に親しくなった病院勤務の薬剤師で、高山病にも詳しい)、ツアーサービスの方と同行の鹿屋体育大学の山本正嘉教授(彼らは自分の所に低酸素室があるから高度順応は日本を出る時までに済まして来たそうで、BC到着の翌日頂上目指して登って行った。山本先生は南壁フランス・ルート・ジャパニーズ・バリエーションの初登者としてアコンカグア登攀史にその名を残しておられる)、単独で来て高山病になり下山勧告で降ろされた埼玉・東松山の旅館の若主人、大学を出て1年間風来坊をしていたが来年から消防署に就職が決まったという霞ヶ浦辺りの若者(飛ばし過ぎて肺水腫に罹り、ドクターから下山勧告。レンジャーからの看護要請で我々の“居間”テントを提供し、一晩中病状を監視)、世界漫遊(放浪)の途次遊び心でアコンカグアにも立ち寄ったと言って易々と登頂を果たしてきた奈良の若者、etc.



(ドクターステーション)

ある晩テントで夕食を喰っていた時、レンジャーのボスが“¿Quieren ustedes ayudarme?, por favor.”

(Would you please help me?)と訪ねて来た。彼はヒゲ

を生やして威厳のある顔をしているが、いつもは“Hola, . . .”でやりとりする間柄である。この時はマジメな顔をして少し慌てているような気配であった。何事かと聞いてみると、今日の夕方BCに登ってきた日本人2人パーティがどちらも肺水腫に罹っていて下山勧告したのだが、その内の一人が勧告を拒絶し、治療も拒否しているのでお前から説明と説得をして貰いたいとの依頼であった。レンジャー、ドクター同道でこのパーティーを訪ねたが、正直この拒絶氏には少々手こずった。

拒絶氏「ドクターから、酸素飽和度が50しかないし、肺ナントカに罹っていると云われた。ワタシは異常は全く感じないし、去年はキリマンジャロに登った経験もある。酸素チェックは機械が間違っていることもある。折角高い飛行機代を払って地球の真裏まで来てBCまで登っただけで帰れとは何事であるか。きっと日本人を標的にしているに違いない。治療も下山勧告も拒否する。ワタシの今後の行動はワタシ自身で決める」

ドクター氏「アナタハ、肺水腫デアル。コレ以上病状ガ進マナイヨウニ、ダイアモックス錠ト注射ヲスルカラ尻ヲ出セ。明日ノ朝ラバで下山サセル」

拒絶氏「拒否する。どうしようと、ワタシの勝手である」

ドクター氏「肺水腫ハ重篤ナ高山病デアルコトヲ認識セヨ。我ガ国デハ、肺水腫ニ罹ッタ者ハ1年間高山ニ登ルコトヲ禁ジテイル。高山病ガ進行スレバ、肺水腫ダケデ無ク、脳水腫ニモ発展スル。昨年ノ遭難死ノ例デハ、ウンウンカンヌン . . . ??□△○?? . . .」

拒絶氏「ワタシは日本人だ。貴国の規則に従う必要はない」

レンジャー氏「ソコマデ言ウナラ言ウガ、アナタハ入山許可証ノ注意事項ヲ熟読シ、規則遵守ノ署名モシテイル筈デアル」

(入山許可証には、アコンカグア州立公園内ではレンジャーの指示に従うこと、ゴミを捨てないこと、環境を守ることなどが小さなスペイン語で書いてあり、許可取得時に署名させられるが、こんな小さな文字は誰も読んではいないし、スペイン語を解しない人も多いだろう)

拒絶氏「そんなことは知らない。参考までに、下山勧告を拒絶したらどうなるのか?」

レンジャー氏「勧告ヲ受ケ入レルコトヲ強ク勧メル。拒絶シタ場合ハ、誠ニ残念デハアルガ、州法ヲ破ッタ犯罪者トシテ当局(警察)ニ引キ渡スコトニナル。ゴ参考マデニ言ッテオクガ、我ガ国デハ裁判ニ

ハ多クノ時間ト金ガ掛カリ、アナタハ拘留サレテ当分ノ間、帰国ハ覚束ナイデアロウ」

という次第で、拒絶氏は明日の朝再度診断して貰い、その結果でレンジャーに再判断して貰うという条件で一応納得して尻を出し注射を受けた。(翌朝、再度診断があったが、ドクターの言うことは同じで、結局その日に渋々ラバで下って行った。ドクターが高山病と診断すれば、レンジャーはイエローカードを2枚書く。1枚は下のレンジャーステーション宛、もう一枚は患者が加入している保険会社宛のものである。いろいろなケースを見ていると、一度ドクターが決定すれば、様子を見て快復したら再度判断するなどということはなく、最初の決定でイエローカードの作成、下山のラバ手配などが総てなされてしまうらしい)

以上の会話はスムーズにいったように書いたが、実はこの時のドクターはスペイン語しか話さず、エスパニョール俄仕込みの小生には難しい医学用語など分かるはずもない。従ってドクターのスペイン語をレンジャーに英語に訳して貰い、それを日本語で拒絶氏に伝えるというややこしいことになったから、拒絶氏もイライラしたことであろう。拒絶氏から見れば、何で他の日本人が介入してきて当局側に味方するのかと、面白くなかったであろう。その様子が顔にも現れていた(後日談。帰国後この拒絶氏から丁寧なお礼メールを頂いた。帰国後医者に診断して貰ったところ、その折には肺水腫の症状は無かったそうである。某県山岳連盟で役員をしておられる方とのことだった)。

12月24日はクリスマス・イブ(Noche Buena)。大きなラバ屋ではシャンパンを抜いてドンチャン騒ぎである。その内の一つに行ってみた。邪宗門は入れてくれないかと思ったが、宗旨は問わず誰でもウエルカムのように、多くの国々からの登山者が集まりワインがぶ飲みパーティーとなっていた。我々もワインの回し飲みに参加した。エイズやSARSの危険が一瞬頭を掠めたが、マア、郷に入れば郷に従えである。



さて、BCで高度順応が完璧なら、前進キャンプは所謂折れ線グラフ方式(“climb high, sleep low”を繰り返しながら順次高度を上げていく方式)ではなく、右肩上り方式(高度順応のために一旦下に降ることをせず一気に高度を上げる方式、“climb high, sleep high”)が良いというレンジャーの勧めで、第1キャンプ(キャンプ・カナダ)にだけは登降方式で荷揚げしたが、第2キャンプ(ニド・デ・コンドレス、コンドルの巣)、第3キャンプ(キャンプ・ベルリン、最終キャンプ)にはそれぞれ1泊だけして、ベルリンからそのまま頂上を狙うことにし、

12月28日BCを出発した。前進1泊目のカナダでは、イタリア隊から紅茶とチョコレートを御馳走になり、お返しにヨーカン差したりして交歓した。2泊目のニドでは、小型ではあったが岩壁に舞うコンドルの番い(つがい)を見ることができた。ここはアコンカグアの北西稜がクエルノ山に落ちる広大なコルで、大きな雪田が残っている。上部ペニテンテスの下の誰かが積んだ石積みの中に天幕を張る。前回はここで肺水腫に苦しみ、他のパーティーのガイドの進言で翌朝リタイアして下山したが、今回は高山病の症状もなくルンルン気分である。



(キャンプ・カナダ)

話がBCに戻るが、盆地状になっているBCを取り囲んでいる屏風のような山なみは5000m級の岬々たる岩山の連なりで、オルコネス谷の奥に城郭の尖塔のような姿で聳えているカテドラル山からクエルノ

山を經由しニド・デ・コンドレスに至る縦走は、例えば雪が付いた劔・八ツ峰の標高を2倍に上げてその規模を数十倍くらいに拡大したようなものといえ、大体の想像がつくと思うが、いつかは縦走してみたい稜線である。ひょっとしたら世界初踏かもしれない。マア、儂い夢に終わるかも知れないが、その“見果てぬ夢”のためにニドからクエルノ山への稜線の偵察を兼ねてコルの西端まで歩いてみた。稜線北側の斜面には深く切れ込んだルンゼが何本も食い込んで、劔岳の東大谷のようであった。

ふと見下ろした暗いルンゼの棚に何やら白骨のようなものが見えた。遭難遺体か!? よく見るとそれはラバぐらいの大きさの動物の白骨であった。運搬に使われるラバはこの辺りを通ることはないし、野生のグアナコ(リヤマの一種)も一木一草も生えていないここまで登って来る筈もない。さては・・・?

確か Secor の本にも、古代インカの祭祀跡がアコンカグア南東稜のピラミダル峰付近で見つかり、そこにはミイラとグアナコの骨が残っていたと書いてあった。古代のインカは高山のいたるところで祭祀をしたという考古学者の説もあるから、ひょっとしてここもミイラを祀ったインカの祭祀跡ではないか? さすれば、その辺りの岩棚には虚ろな目をしたミイラがじっとこちらを見ているのではないか? いろいろ考えているうちに、前回の旅の途次にペルー・リマの民族学・考古学博物館で見た多数の屈曲ミイラを思い出して背筋が寒くなってきた。



(グアナコの白骨? さすれば付近にミイラも?)



(ニドのペニペンテス)

ニドから上は小生には初めてのルートであるが、相棒のパンチョは前回もベルリンまで登っているから、彼を先導にバッチグーで高度を稼ぎ、早くも昼過ぎには標高5,900mの第3キャンプであるベルリンに登り着いた(下写真2枚)。ここは、アコンカグア山頂に至る肩の様な場所で、さして広くはないが登ってきたニドのコルや遙か下方にはBC裏のオテル・レフヒオ(山小屋)が良く見える眺めの良い伸びやかな平地であった。期待していた一番大きい三角屋根の避難小屋は先客に占領されて足を踏み入れる余地も無かった。他の二つの三角屋根は雪が吹きこんでいて使用に耐えないが、その内の一つにはメキシコのパーティーが雪を半分程掻き出して潜り込んでいた。



仕方ない。外張は盗まれて無いが、天幕を張るしかない。苦勞して天幕の中にツェルトを張って内張りの代わりにする。その分天幕内部が狭くなって、2人座るのがやっとの広さであるが寒いよりはマシだろう。その辺で拾ったペットボトルを洩瓶に使ってみたが、これはなかなか調子が良かった。天幕の外に出ないで用達しできるだけでも助かる(シュラフカバー、シュラフ、天幕の各ジッパー、外張の吹き流しの開閉、オーバーズボン、ズボン、パンツの各ジッパーの上げ下げは、酸素が薄い高所においては、これだけで想像以上の重労働で、ヘトヘトになってくる。おまけに高山病予防のために大量の水分を摂取しているので、夜間も4回ぐらい催すから用足しも死ぬ程の作業となる)。洩瓶式には最初は慣れていないので、中腰と手元のバランスが取れなくて隣に寝ているパンチョのシュラフの上に垂らしたりした(ゴメン)。また、小生のモノは立派すぎて、日本の2倍くらいはあるアルゼンチンのペットボトルの口にも入らないから、口から液体が溢れたりした。(今回は、キャンプサイトで拾ったペットボトルを水用にも使ったが、ひょっとして外人のオシッコの残滓を飲んだかもしれないナ)。

さて、翌朝は大晦日(Noche Vieja)。

今日は6,960mの頂上を往復する日である。標準コースタイムはキャンプ・ベルリンから往復12時間であるが、我々ロートル組は16時間はみななければいけないだろう。午後14時までに山頂を下らなければ、日中の暖かい時間帯に(暖かいといってもマイナス20度くらいにはなる)ここまで帰着できない。従って早朝の4時には出発しなければならない勘定になるが、寒くてテントから出る気がしない。

マア夜の21時までは明るいから何とかなるワイとタカを括って6時に出発してはみたものの、寒くて寒くてどうにもならない。高所防寒用に新調した羽毛服上下は鼠に盗まれているから、身体が寒い上に手足の感覚も痛さを通り越して感覚が無くなってきた。これはイケナイ。指が凍傷に罹ってヘタをすればメンドーサの病院で切断、長期入院となるやも知れぬ。Secorの本にも、凍傷になった指を切断して苦しんでいるクライマーの例が沢山書いてあったではないか。やはりここは「(凍傷の危険を冒してまで)アコンカグアの山頂に立つことは、指1本失うことにも値しない・・・」というSecor先生の教えに従うにしくはない。相棒のパンチョは如何にやと彼を盗み見ると、彼も震えているようだ。ヨッシ、ここはベテランの分別で「勇気ある撤退」といこう、ということで1時間程登ったところで天幕に逃げ下った。

天幕の中でストーブを炊き、やっとな心地を取り戻した。9時になれば太陽が昇って暖かくなる。パンチョは前回6,030m地点まで到達しているのだから、今回はそれを若干でも上回りたいという。もっともな要求であると10時に再び上に向けて出発した。どうせ山頂まで行ける時間はないから、気楽なものだ。前回の彼の到達高度を10mだけ上回る標高6,040mでリタイア。ここはホワイトロック・キャンプサイトのすぐ下の広大な泥の斜面で、右手下方には長大なギュッスフェルト氷河が見える。頂上は始終右上の今にも手が届きそうなくそこに見えるのだが、実際は比高にして900mも上であるからアコンカグアの規模の大きさが想像できよう。



(恥ずかしげもなく日の丸を・・・)



(リタイア標高を示す高度計。6040m)

6,000mの高度に長居は禁物である。早々にベルリンに戻り天幕を撤収、BCに走り下った。BCでの高度順応期間も含めて、BCからベルリンまで11日間を要したが、下りはこれを4時間程で駆け下った計算になる。高度順応と高所での登高に如何に時間を要するかが分かろうというものである。

昨年と比べると、今年はBCの国籍構成がかなり違ってきたように思われる。前は西欧人が大多数を占めていたが、今年は地元アルゼンチンや中南米の各国、韓国からの登山者が多いように思われた。ヨーロッパも旧宗主国であるスペイン以外にイタリア、フランス、イギリス、ギリシャ、ロシアと色々な国から来ている。アルゼンチンは国家経済が破綻しており、入山料(アルゼンチン人は半額)だけでも庶民の月収の2~3ヶ月分に相当するから大変な出費と思われるが、彼らは元来陽気な民族であるから余りにしないのかもしれない。いずれにしても、自国の山が西欧系の外国人ばかりに占領されているような状態は好ましいものではなく、特にスペイン本国からの圧政やイギリスとのフォークランド紛争を経験した彼らにとって、西欧列強からの登山者ばかりでは面白くないであろう。自国や中南米各国からの登山者が増えることは良いことである。

翌朝、お世話になったラバ屋のボニータちゃんのアドリアーナとセニョール・チャプリン、レンジャーやドクターに別れを告げ、オテル・レフヒオに立ち寄ってコンフルエンシアに向けて下山した。



(ラバ屋ロス・プキオスのアドリアーナとチャプリン)



(頼かむりさせられたラバ)



(コンフルエンシアに張ったテント)



(コンフルエンシアの業者大型ドームテント)

途中コンフルエンシアで1泊、翌日アコンカグア南壁を觀に小オルコネス溪谷を遡った。このトレールは南壁から流れ出す氷河の左岸に沿って付けられており、クエルノ山から流れ出すオルコネス本流のトレール(プラサ・デ・ムーラスへの径)とはまた違った趣のあるトレールであった。右側にはアコンカグア東南稜から派生する大岩壁の褶曲した断層が始終間近に眺められ、左側には泥を被った氷河の断層がキラキラと光っていた。赤茶けた河床には天狗の踊り場ほどの空地もあってのんびりできるトレールである。登るにつれて、氷を纏った南壁が徐々に姿を現してくる。振り返れば、パンアメリカン・ハ

イウエーが走るクエバス溪谷の遙か彼方には、アルゼンチン・チリ国境の雪を被ったアンデスの連嶺。



(小オルコネス氷河のモレーンからアコンカグア南峰南壁) (天狗の踊り場。後方はアルゼンチン・チリ国境のアンデス)

もう少し上に登れば南壁の全貌が良く見えるのであるが、そこまで行く時間は無いから小高くなったモレーンに寝ころんで、南壁を眺めた。南壁にはフランス・ルートやスロベニア・ルートなどの多くのバリエーションルートがあり、Secorの本にも詳述されている。この本は自分でも試訳したので、頭の中に残っているルートのあれこれを実際の壁に当てはめてみたが、記憶とは曖昧なもので殆ど再現できなかった。

コンフルエンシアに帰着してから、登山口のプエンテ・デル・インカまで3時間も歩いて下るのが面倒臭くなってきた。そうだ、ここからなら空荷の下りのラバをつかまえれば格安で乗せてくれるのではないか。パンチョも一度ラバに乗ってみたいという。業者テントのネーチャンに聞いたら隣の大型ドームテントの番をしているオ兄ちゃんを紹介してくれた。「ラバデ降りタイノカ、ヨロシイ。暫シ待テ」と何処かに消えた。アリエロ(馬方)達とテント番のお兄ちゃん達は裏でつるんでいて、社長には内緒で乗馬斡旋などのアルバイトもしているらしい。何処からか戻ってきて、正規の(会社を通した)料金は1人120ドルであるが、俺が上から降りて来るアリエロと交渉して55ドルで世話をしてやると言っ、無線で何やら交渉しているようだ。ラバ隊が2組ほど降りて来て、彼が何やら交渉していたが不調に終わったようだった。

件のオ兄ちゃん曰く「今日ハ、らばハ、モウ降りテ来ナイカモ知レナイ。明日ノ朝ニナレバ、らばハ沢山来ル。明日ナラ45ドルデOKダ。俺ガ責任ヲ持ッテ交渉スルカラ、今晚ハココノ大型ドームテントに泊ッタラドウカ?」。つまりは、オ兄サンにとっては二重のおいしい商売となるから、これを喰えとマンサーナ(リンゴ)などを持ち出してきて愛想が良い。

「我々はそうはいかないのだ。18時には専用車が下まで迎えに来てくれているから、それまでに下らなければならない。ギリギリ16時まで待つから、それまでにラバが手配できなければ、この話は無かったことにしよう」。

お兄さん「OK。ソロソロ次ノらば隊ガ降りテ来ル時間デアル。暫シ待テ」とラバ隊が降りて来ないかと上の方を凝視しているが、その気配は無かった。お兄さん「今日ハ、救助ガ忙シクテ、人用ノ鞍ヲ付ケタ、らばガ出払ッテイルラシイ。仕方ナイ」とがっくりと肩を落とした様子で気の毒ではあったが、こちらにも泊まれない事情があるから致し方が無い。50ドルと言えばアリエロと半分づつに山分けしたにしても、お兄さんにとっては半月分の所得であるから、大魚を取り逃がした訳で、誠に愁傷様であった。(このお兄さんはスペイン語だった。金が絡む交渉事であるから、我が輩のカタコトのエスパーニョールでは心もとない。たまたま居合わせたアルゼンチン人の登山者に英語で仲介して貰ったのが上の会話である)

オルコネス・レンジャー・ステーションまで迎えに来てくれている専用車のピックアップ時間に間に

合わすために、脇目も振らずオルコネス谷のガレ道をジャスト2時間で駆け下った。オルコネス谷の出口で最後のアコンカグアを振り返ったが、その姿は既にミラドール峰の陰に隠れてしまっていて見えず、代わりに広大なオルコネス谷の奥に屹立している秀麗な岩山・カテドラル峰を拝んで、2週間も滞在しながら今回もまた登れなかったアコンカグアに別れを告げたのであった。

プエンテ・デル・インカにあるアコンカグア遭難者の共同墓地にお参りしてから、パンアメリカン・ハイウエーを飛ばし、メンドーサの増田農場に帰着したのは午後10時半であった。同宿者は誰も居ず、またまた離れを独占してパブロ・ビールを痛飲することと相成った。

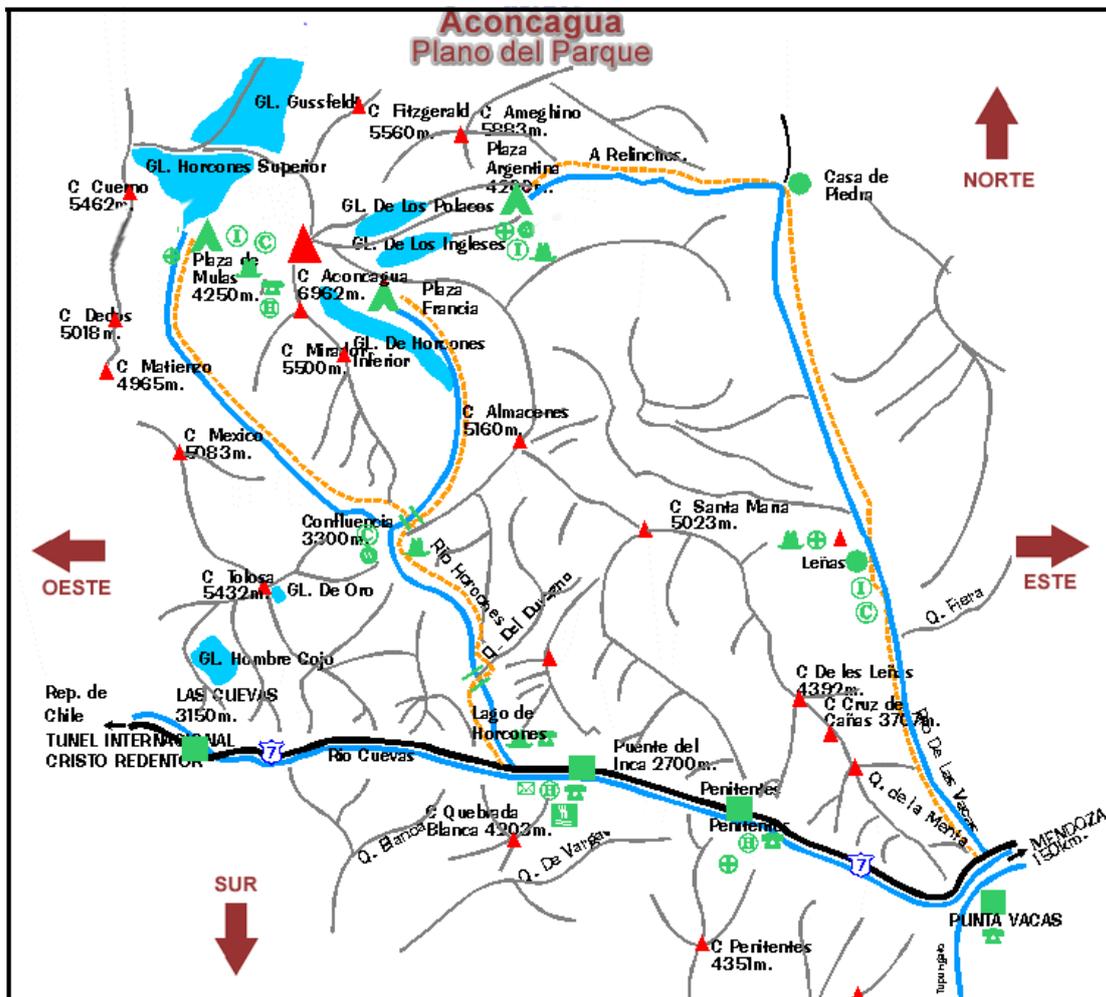
アコンカグアは気紛れな山であって、登頂の成否は高度馴化5割、天候5割であると言われている。三度目の正直という諺もあるから、必ず登頂するという意地と周到な登頂計画、体力の増強訓練を行って、来るシーズンに備えたい。(2004年1月記)



(オルコネス谷の奥に屹立しているカテドラル峰)

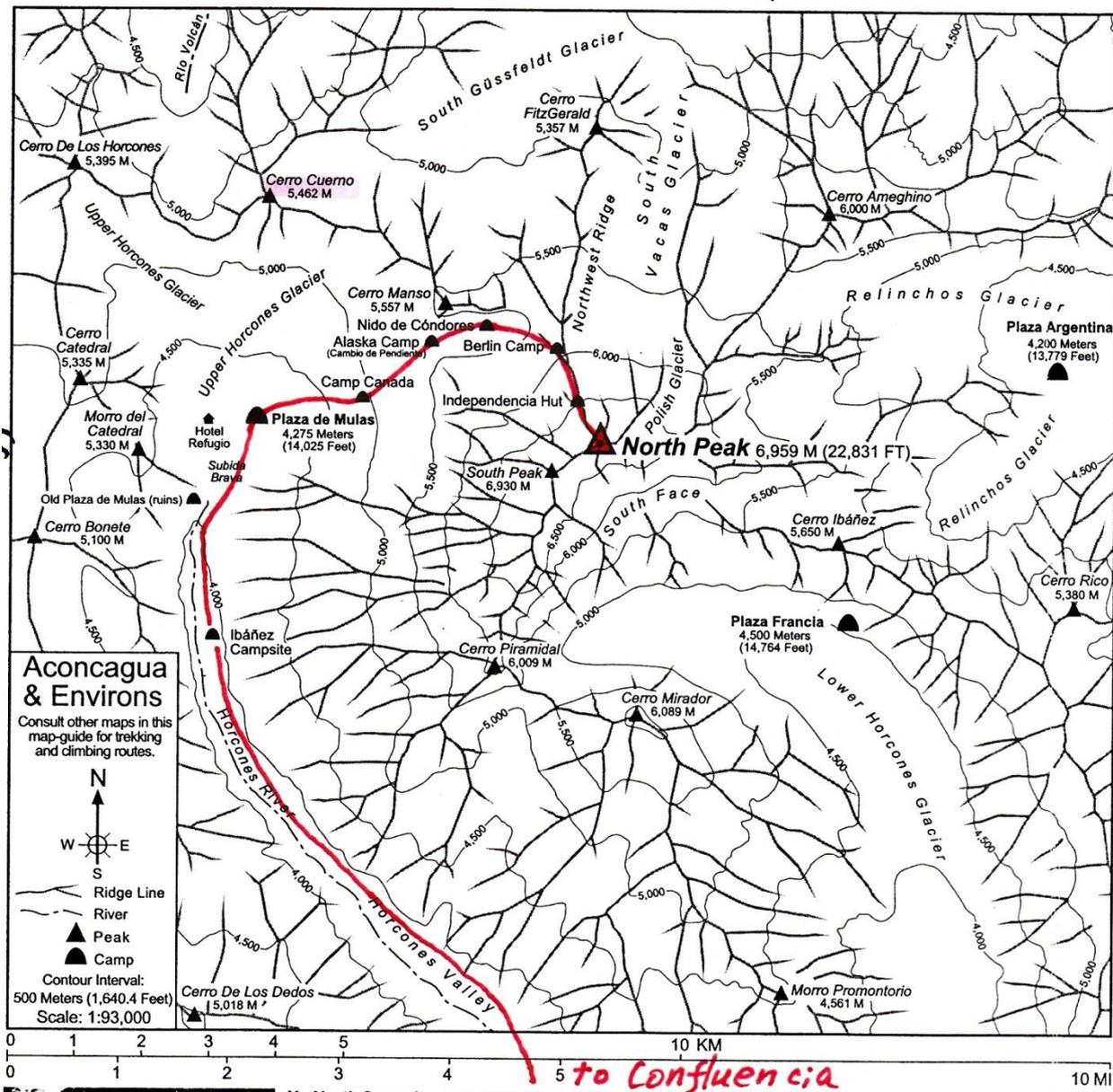


(遭難者共同墓地に参る)



ACONCAGUA Summit of the Americas

A Map-Guide for Climbers and Trekkers by Ed Darack



(以上 アコンカグア登山編 完)

以下は下山後のパタゴニアとウルグアイへの旅行記である。登山ではなく物見遊山の弥次喜多道中記であるので、興味の無い方は読み飛ばして下さい。

パタゴニアとは、南緯 40 度以南の南米大陸の呼称であり、北部と南部に大別される。“パタゴニア”とは、500 年程前マゼランによって「発見」された時、先住民がグアナコの毛皮を着て足もグアナコの毛皮で作った大きな靴を履いていたところから、パタ(足)+ゴン(大きい)に由来すると言われている。特に南部の山と湖に囲まれたパイネやカラファテ、最南端の街ウスワイア、チリ側のフィヨルドの氷河などが有名であるが、今回はそこまで足を延ばす日程がとれず、北部のバリローチェ(アルゼンチン側)とプエルト・モン(チリ側)を廻ってきた。

メンドーサからはバリローチェ行きの長距離バス(片道 14 時間)が出ており、これを利用すれば格安なのであるが、アルゼンチン経済の不況からバスの便が減便され、また今までは海外旅行に出ていたア

ルゼンチン人観光客が国内旅行に切り替えているので、バスも飛行機も満員で切符が取れない状態になっている。それでもスサーナさんが早めに手を廻してくれたので、やっと1便だけ飛行機の切符がとれたが、それも太平洋側のメンドーサから一旦大西洋岸のブエノスアイレスに飛び、そこで乗り換えてパタゴニアとは反対側のコルドバを経由して再び太平洋側のバリローチェに飛ぶという便であったから随分と遠回りをした訳である(メンドーサからバリローチェ行きの直行便はない)。お蔭でパンパとはまた違ったコルドバの丘陵地の景観を機上から楽しむことができたし、飛行機にしたお蔭でその日の内にバリローチェに入ることができた。メンドーサから正味5時間飛んで、日本の農道空港ぐらいの大きさしかないテニエンテ・カンデラリア空港に着陸。砂漠の中に一本滑走路があるだけの極めて素朴な空港であった。タクシーでバリローチェのセントロへ。

バリローチェはチリとの国境近くに位置し、南米のスイスと呼ばれる避暑地である。ナウエル・ウアピ湖(Lago Nahuel Huapi)という大きな湖に面した坂の多い小さな町で、後背地にはカテドラル山、ロペス山、オットー山、カンパナリオの丘などがあって、山と湖の風光が明媚である。気候は丁度日本の秋ぐらいで、灼熱のメンドーサから来た身には爽やかであった。



(ナウエル・ウアピ湖と対岸のロペス、カテドラル山。左端がバリローチェの街並)

ホテルは、今回は全て満員で事前に予約できないから現地で探してくれということだったので、ホテルが探せるかどうか不安ではあった。メンドーサのツーリスト(Andesmar)が2~3星クラスを幾つか教えてくれていたから、初日はその中からタクシーの運ちゃんに頼んで“Sol y Sky”というホテルに連れて行って貰った。運良く空いていて、綺麗な二人部屋(1人1泊15^{ドル})が確保できた。部屋の窓から足下に湖がよく見えるレイクビューの部屋であった。1500円ほどで立派な部屋に泊まれるのであるから有り難い(帰りにバリローチェにもう一泊しなければならないので、予約しようとしたら、午前10時にならないとコンピューター・オンラインが繋がらないので今は予約状況が分からないから、予約を受けられないと断られた。どうもその日の10時にならないければ、ツーリストからのその日の予約が入電しない仕組みになっているらしい。ただ、どんな小さなホテルでも全てパソコンが入っていてオンラインで予約が入るシステムになっている)。

夜は、運転手君推薦の“El Boliche de Alberto”というレストランで肉料理を喰う。1人当たりセルベッサも含めて12^{ドル}(40ペソ)であったから、決して高くはないのであるが、メンドーサでは15ペソ

程度で豪華な夕食にありついていたから、随分散財をしたような気分になった。地元で人気が高いレストランのようで玄関先まで大勢のロコが並んで待っていた。バリローチェはメンドーサより更に西側にあるから、それだけ日暮れも遅く夜の9時半まで明るかった。

ホテルに帰り、些か疲れたというパンチョを部屋に残して独りで下のバル(bar)を覗いてみた。隅っこの椅子に座り独りでセルベッサを呑んでいると、隣のテーブルの3人組が

“¿Chino, coreano o japonés?”と声を掛けてきて、こちらのテーブルに來い、一緒に飲もうと言う。

俺は日本語を知っていると盛んに「コンニチハ」の連発だ。そのうち奥のテーブルで独りで呑んでいた五分刈りお兄さんもやってきて賑やかになった。3人組の親分肌がセルベッサをジャンジャン頼んでしきりに回し飲みを勧めてくる。ここでもAIDSの心配がチョロっと頭をよぎったが、親分肌には健康そうではち切れんばかりの奥方も同道していたので、マアその方面の心配はあるまいと素直にご好意を受けることにした。

五分刈りはフォークランド生れのイギリス2世のアルゼンチン海軍軍人で、フォークランド紛争(アルゼンチン側ではマルビナス紛争という)の時もアルゼンチンの軍人として戦ったそうだ。それ以来イギリス人である両親との間がうまくいかなくなって、この休暇もフォークランド島の両親のもとに帰らず、独りでこのような田舎(バリローチェのこと)を旅行しているのだそう。両親との関係をどうしたら改善できるかとしきりに親分肌聞いていた。異国での政治と宗教の話は禁物であるし、ややこしい内容を理解できる程のスペイン語力も無いので、親分肌が大好きらしい「日本デハあちらハ週ニ何回ホド致スノカ?のびあ(恋人)ハ何人クライ持ッテイルノカ?、ばいあぐらハ使ウノカ? 貴国ニモ estilo de perros(ワンワンすたいる)ハアルノカ?」などという話題に専念した。半分絵混じりの筆談で我が朝の大奥絵巻の四十八手裏表を解説してやったら、親分肌は大喜びで、もっと詳しく日本のことを聞きたい、俺の家はこの近在だから明日訪ねて来てくれ、家で飼っている牛を1匹殺してバリローチェ名物のアサードをしこたまご馳走したいし、何日でも泊まって行ってきてよだからと紙にアドレスを書いて渡してくれた。

親分肌は、日本という国は南米のどこか隅っこにある小さい国だろうぐらいの世界認識しかないので、聞きたいという日本の「コト」とは、大奥秘話の続きのコトに違いない。残念ながら、翌朝は長距離バスでチリに入国する予定になっていたから、親分肌の家で一宿一飯の恩義に与かる機を逸してしまった。再び行く機会があれば、親分の屋敷でアサードのご馳走に与りながら、大奥秘帳の続きをやりたいものである。

翌朝タクシーを捕まえて長距離バスターミナルに向かう。10時出発予定のプエルト・モン(チリのパタゴニア)行きの国際バスは時間を過ぎててもなかなか現れない。切符を予約しておいたツウリストのAndesmarのオッサンに聞いてみると、15分遅れで来るから暫し待てとのことだったが、結局バスが来たのは1時間遅れであった。メンドーサでは全て我々専用の車を使い、この専用車の運転手君は増田さんから時間は必ず守るようにとキツク言われていたから、今まではあまり気にしなかったのであるが、アルゼンチンでは約束時間に遅れるというのは日常茶飯事の常識であったのだ。時間待ちにバスターミナルのすぐ前の鉄道駅に行ってみた。線路はあったがペンペン草が繁っていたから廃止されたのであろう。目の前にはナウエル・ウアピ湖のさざ波が朝日に輝いていた。

風光明媚なナウエル・ウアピ湖畔を走ったバスは2時間ほどで湖畔北端の保養地“Villa La Angostura”



(バリローチェのセントロ広場)

に着き 30 分ほど休憩。ここからは丘陵地帯に入って国境を越えチリに入る。国境といってもアルゼンチン側のイミグレーションの建物があるだけの山中のゲートで、出国手続きもバス乗客リストの順に呼ばれて直ぐに済んだ。チリ側のゲートは山道を更に 1 時間か 2 時間ほど走った先にあった。この辺りはアンデス山脈の尻尾に当たる部分で標高もかなり低くなっており、多くの湖とそれを取り囲む岩山、豊かな森などが車窓に広がり飽きさせなかった。オソルノという小さな町を過ぎれば、そこはチリの



(アルゼンチン・チリ国境のゲート)

Los Lagos 州で、名前のとおり多くの湖(Lago)が点在している。一番大きな湖は海かと思うほど大きい Lago Llanquihue(ジャンキウエ湖)で対岸にはチリ富士と言われている端正なピラミッド峰・オソルノ山(2,600m)が真っ白な雪を被って美しかった。穏やかな丘陵地帯を道路が一本通っているだけで、家屋なども全く見えない広大な原野であるが、所々に牧場があった。牧場といっても、余りに広大すぎて牛の群れなどは全く見えなかった。



(ジャンキウエ湖の対岸に聳える真っ白なオソルノ山)

バリローチェを出て 8 時間ほど後に、パタゴニア観光のチリ側の拠点プエルト・モンのバスターミナルに到着。ここは太平洋に面するかつての漁港で今も素朴な小さな街であったが、後背の傾斜地には住宅が絵の様に貼りつき足下の群青色のレロンカビ湾の向こうには雪のオソルノ山を望む美しい風景であった。ただ、セントロの町並みはバリローチェほど整備されておらず、ホテルの外観も薄汚れていてゴチャゴチャとした漁師町という印象ではあった。



(←高台より俯瞰したプエルト・モンの街並み。左の海はレロンカビ湾)

(↓バスターミナル前の露天市場)



バスターミナル前の広場では、魚や野菜や雑貨の露天商がリヤカーを並べ、夕方には露天串焼き屋の煙が漂う。貝を天日で干して縄に通したのものや、海草?を干してレンガ状に畳んだ物など、珍しい物もあった。串焼き屋のオッサンは薄汚れたボストンバッグに肉を詰め込み、簡単なバーベキューセットを持ってどこからか現れて道端で煙を出し始める。試しに喰ってみたが、軟らかくて極めて美味であった。“¡Qué rico!” (Delicios!)と賛辞を呈したら、オッサン、ニカニカと相好を崩して喜んだ。

バスターミナルにあった Cambio(両替屋)も素朴なものであった。窓口に食欲そうな婆アが一人いるだけで、電卓にレートの数字を打ち込んでこれで良いかと電卓を寄越す。アルゼンチンでは必ずパスポート番号をパソコンに入力し、プリントアウトされた書類にサインを求められ、半券のレシーボを寄越すが、ここでは左様な書類は全くなく、交換したチリ・ペソが返ってくるだけ。レートも、小生の場合は 1US_{ドル}=580 チリ・ペソであったが、数分後に行ったパンチョは 570 だったそうであるから、エエコロ加減かもしれない。アルゼンチン・ペソでは 1_{ドル} 3 ペソの感覚であったから、チリ・ペソでは桁が 2 ツ以上違う訳で、公衆トイレのチップも 100~200 ペソ、ちょっとしたレストランでも 5,000~10,000 ペソになるから、最初は面食らって、金勘定がおかしくなってしまった。紙幣のデザインもユニークで漫画チックな絵が印刷されていた。

「地球の歩き方」に載っていた安ホテルの中から適当に近場を選んで海岸通りの Hotel Colina に泊まる (17_{ドル} 50 セント/人)。

折角漁港に来たのだから夕食には久し振りに魚でも喰おうやと、これも同じく「地球の・・・」に日本語メニューがあり、魚が美味いと紹介されていた“Dinos”というレストランに行ってみたが、ウェイターのオジサンがお勧めというタラバガニの足も干からびていて全く美味くなかった。ウェイターの「コンバンハ、アリガト、サシミ、タラバガニ」だけがご愛嬌であった。アルゼンチンの安価な料理と桁数が少ない通貨に慣れきっていた我々は、請求書の 39,000 という数字を見て仰天した。ドルに割り戻せば 2 人分で 65 ドル程度であるから、日本なら横丁の焼き鳥屋程度の値段なのだが・・・。

プエルト・モンはチリ・パタゴニアの観光基地であるから、色々なツアーがある。圧巻は、海に崩れ落ちる豪快なサン・ラファエル氷河を見ながら太平洋岸のフィヨルドをプエルト・モンからプエルト・ナターレスまで往復するクルーズ(6 泊)であるが、これは一週間に 1 便しかないし、船上のダンスパーティーではタキシード着用が常識であるそうだから(冗談?!)、所詮我々には縁がない。何しろ、パタゴニアという所は交通が極めて不便で、たった 1 日間のパタゴニア観光をするためにメンドーサから往復 5 日間を要するのである。我々の手持ち時間は 1 日だけであったから、バスターミナルにある観光案内所で 1 日バスツアーを申し込んだ。“Excursiones Petrohue” という湖巡りのツアーである(ツアー代 10_{ドル}+湖クルーズ料 2500 チリ・ペソ/2 回分+国立公園入場料 1200 チリ・ペソ)。客はアルゼンチン人が一番多く、他は殆どが南米各地からの観光客であった。日本人は我々 2 人だけ。

プエルト・モンの高台からプエルト・モン市街の全景を楽しんだ後、ジャンキウエ湖に至り、湖に写った逆さチリ富士のオソルノ山や、ポサ湖やトドス・ロス・サントス湖でのクルージング、オソルノ山から流出するペトロウエ川が陥没してできた豪快なペトロウエ滝などを見学する 10 時間ほどのツアーであった。

1 人余分にませ過ぎたらしく、ガイドのお兄さんからあなたの席にアベックを座らせたいから助手席に移ってこないかと言ってきた。お蔭で運転席横の最高の席から眺望を満喫することができた。



(プエルト・モンの街角で見たヘンな彫刻)



(オルソノ山、別名チリ富士とペトロウエ滝)



(トドス・ロス・サントス湖でのクルージング。右写真の人物はパンチョ)

今夜の宿はヒョンなことからやもめのオバサンが経営する民宿に泊まった。朝、バスターミナルでツアーバスを待っていた時、何やら客引きのようなオバサンがやって来て、今夜の宿は決まっているのか、決まっていなければ私の民宿に泊まれ、すぐこの近くだからと纏わり付いて離れない。ツアー会社のアンチャンもオバサンを指してこの人は「独身」だからネとニヤニヤしているし、些かうさん臭そうでもあるし、手書きの値段表と地図を予め用意しているのも何となくいかがわしそうだったので、適当に受け答えをしていたら、日本語で書かれた値段表を出してきた。聞けば日本人客も何人か泊まったことがあり、この値段表も日本人に書いて貰ったのだという。ではマア、帰ってきてから決めるよと別れたのであるが、ツアーから帰って歩いていると、



り会った。今更ホテルを探すのも面倒臭いし、オバサンの顔をよくよく見るとそれほどうさん臭くもないようだからとオバサンの後について行った。所謂 B&B で、夜間もカギを渡すから門限もないという。通された部屋は、新しくはないが小ざれいに整頓され、ちゃんとベッドメイクもしてあった。宿泊料も1人5000チリペソ(9ドル程度)だから破格に安い。

街での夕食から帰ってセルベッサを頼んだら、在庫が切れているからと深夜のスーパーまで買い出ししてくれた。オバサンとセルベッサを飲みながら英語混じりのスペイン語で四方山話をした。居間の壁に紳士の写真が掛けてあった。オバサンの話では亭主に死に別れてから民宿を始めたという。確かに家の間取りは普通の民家であった。地元の高校を優秀な成績で卒業しサンティアゴの大学に入っている息子が自慢という人の良い普通の主婦であった。人は風采だけで判断してはいけない。ただただ己の不明

を恥ずるばかりである。朝食も決して豪華ではないが、パンや牛乳も食べ頃に温めてあってオバサンの人柄を偲ばせるものであった。民宿の名を“Hospedaje Glaciela”（グラシエラおばさんの民宿）という。

翌朝、来た道をまた長距離バスでアルゼンチンのバリローチェに戻り、カテドラルの前の Hosteria Sur というホテルに投宿した。部屋は狭かったが清潔で親切な宿であった(12ドル/人)。インターネットカフェもあった。

翌日はブエノスアイレスに戻る飛行機の出発時刻が午後であったので、宿に荷物を預けてセントロ・シビコを散策した。セントロ・シビコとはシビック・センターのことで広場の周りに役所や観光局などがあり、足下のナウエル・ウアピ湖の対岸遙か左側には雪を被ったパジョ山(1780m)も眺められて眺望がよい。市民の散策広場にもなっているようだ。広場を囲む石造りの建物は観光案内所、図書館、博物館である。博物館はパタゴニア博物館というが、展示は若干の動植物や初期の入植風景などでたいしたことにはなかった。

空港へのタクシーの中で、どうせ又ブエノスアイレスを経由するのだから、ちょっとブエノスアイレスの対岸(ラ・プラタ河口の対岸)のウルグアイ国に立ち寄ってみようかということになって、バリローチェのテニエンテ・カンデラリア空港のアルゼンチン航空のカウンターで聞いてみたら、予約済みのブエノスアイレスからメンドーサ行きの飛行機の予約は翌日の便に変更できるという。

ブエノスアイレスから対岸のウルグアイの首都モンテビデオへは高速フェリーが通っていて確か片道3時間ほどで着ける筈だ。船のスケジュールはブエノスアイレスの港に行かないと分からないが、マア、もし今日の船便が終わっていたらブエノスに泊まってそのままメンドーサに帰ればいやと、メンドーサ行きの飛行機の便を1日延ばして貰った。

バリローチェからの帰りの飛行機はコルドバを経由せずブエノスへの直行便であったから、2時間でブエノスの国内線専用空港アエロパルケに着いた。タクシーを飛ばしてブエノスアイレスのフェリー埠頭へ。この運チャンは飛ばし屋の雲助で、大型コンテナトレーラーで輻輳している港への道を右へ左へとブツ飛ばしたから怖くて仕方なかった。

港に着いた時、大きなフェリーが出航して行ったのが見えた。残念ながら、モンテビデオへの今日の最終便であった。最終便といっても1日2本しかない。弱ったナア。仕方ない、今日はもうメンドーサへの飛行機便も無いからどこか安宿でも探して泊まるかと思案し始めたら、未練たらしく時刻表を眺めていたパンチョが「オイ、何処に行くのか知らんが、未だ1本残っているぜ。Colonia 行きで乗船時間1時間とあるのは何だ? Colonia とは何処の国だ?」と喚き出した。船でたった1時間で渡れる外国があるのか? 係員に聞いたら、Colonia とはウルグアイ国のれっきとした町であるという。ヨッシ、しめた! それに乗ろう。しかしちょっと待て、帰りの船便がメンドーサ行きの飛行機に間に合わなければ帰れなくなるゾ。これは調べたら朝一番ではあるが、飛行機に間に合うのがあった。早速切符を予約するが、ここのシステムは予約の申し込みと切符の受け取り場所が離れたブースになっていて、少々マゴついた。アルゼンチンでは警備上の理由から銀行などの現金取り扱い窓口は申し込み窓口とは別なブー



(セントロ・シビコとナウエル・ウアピ湖)



(田舎の素朴なテニエンテ・カンデラリア空港)

スになっていて、嚴重なガラス張りで警護されているのが普通。乗船時間まで暫くあるので、待合室のバルでセルベッサを飲みつつ、そこら辺にあったパンフレットで俄知識を仕入れてみたが、何しろウルグアイやモンテビデオについては事前勉強などして来なかったから、さっぱりチンプンカンプンである。まして、コロニアなどという街は聞いたこともない。いったいホテルなどはあるのかネ？ マア無ければ港の棧橋でゴロ寝でもすれば何とかなるサ。我々はルンペンと変わらぬ服装をしているので、強盗に襲われることもなかるう。

ここのイミグレーションは出国側のアルゼンチンの出国係官と入国側のウルグアイの入国係官が同席していて一回で出入国手続きが済むから便利だ(帰りのコロニアの港も同様だった)。

大きなフェリーだった。自称船キチのパンチョによると1万トン近くあるという。序に彼はウンチクを傾けて、客船の場合は排水量をトンで表す、貨物船の場合は積載貨物の体積をトンで表すとノタマった。前者は分かるが、後者の「体積」を「重量」で表すなどということは、小生のような物理学徒には許し難い矛盾であるワイ。奴の講義を承っているうちにフェリーは出帆した。最近の大型船には土手っ腹に噴射装置が付いていて、船は横にも動けるのだと船キチが教えてくれたが、なるほど、タグボートにも引かれることなく、フェリーは狭い棧橋から自力で方向転換して港を出て行った。



(ウルグアイに渡る国際航路のフェリー。ブエノスアイレス港)

ラ・プラタ川は真茶色の泥水の大蛇である。「プラタ」とは「銀」という意味であるが、銀鉱山などからのネーミングではなく、広大なパンパを蛇行する大河の水が陽を受けて銀色に輝いて見えることから名付けられたそうだ。河口幅は40kmありブエノスアイレスで大西洋に流れ込んでいる。河口を大西洋に向けて70km出た所にこれから行くコロニアがあり、200kmの所に首都モンテビデオがある。余談であるが、ウルグアイという国はアルゼンチンとブラジルに挟まれた小国で、主要な街はアルゼンチンやブラジルの金持ちの海の保養地として開発された。

今回は張り込んで“primera”(1等船室)にした。ゆったりした上甲板1等船室には3人ほどの乗客がいるだけだ。船のバルのソファに座ってセルベッサを飲みつつ、遠ざかって行くアルゼンチンの対岸の街La Plataに沈む夕陽を眺めた。

上部船室は海面からの高さが相当高いので、それ程のスピードとも感じないが、船員の話では時速100kmで航行しているという。水中翼船でもないドにかい船のスピードが100kmもでるとはオドロキであった。船会社の名前はBuquebus。“buque”とは船、“bus”はバスである。船籍はウルグアイのモンテビデオ。たった1時間の航海ではあるが、国際航路であるから船の中にはduty freeもちやんとあった。

着岸する船から見ると、コロニアという港町には高いビルも見えず、海に面した岬に貼り付いた小さい町のような感じだ。コロニアはバリローチェとは逆



(ラ・プラタに沈む夕陽を眺めながら)



(モンテ・ビデオの港と褐色のラ・プラタ河⇒)

にメンドーサから 1300km くらい東側であるから、下船した 20 時過ぎには闇夜となった。通りにも人通りが全くなく街灯も暗い。何やら異国の寂れたゴーストタウンに迷い込んだ気配である。

さて、弱ったナア。どうやってホテルを探そうか？ そもそもホテルなぞという代物があるのかいな？ セントロはどちらの方角だ？ 幸い港の道路の入り口に警官が立っていたのでセントロの方角は分かった。しかしホテルなどの看板はない。多少でも灯のある方角に歩いていたら、灯の消えた観光案内所らしきものがあり、丁度オジサンが出てくるところに出くわした。天の助け！ もう 5 秒遅かったら野宿しなければならなかったところだった。オジサンは観光ボランティアで、先刻締めた玄関を再び開けてくれて、安宿に電話して予約してくれ、宿までの道順も教えてくれた。真っ暗な坂道を宿まで歩いた。ここがメインストリートだと思われるが、それにしても全く人気がない。

尋ね当てた安宿は、なるほど場末の裏通りの風情であった。亭主曰く「今晚ハ満室デアル。従ッテ、貴方ノ要求ニハ応ジラレナイ」。伸ばし放題の髭面で人相の悪い顔をした男(即ちパンチョ)を含む中年男の飛び込み二人連れは亭主には泥棒かアチラ方面の趣味を持つ二人組と映ったのかもしれない。「そんな筈はない。我々は先程、観光局から予約を入れて貰った者だが・・・」。観光局と聞いて亭主氏はとたんに態度を変えて「暫シ待ッテクレ、確カ 1 室ガ空イテイタカモ知レナイ」と帳面を繰るマネをした。どこの国でも当局には頭が上がらないらしい。やおら頭を上げて、素晴らしい部屋を用意する、部屋を見てくれと案内されたのは 2 段ベッドの物置程度の代物であった。亭主は、別棟になっている風呂とトイレにも案内して自由に使ってくれと愛想がよい。継ぎ足し継ぎ足しの建物であったが、パティオもあって安宿にしては感じが良かった。おまけに朝食付きで 1 人 1 泊 7 ドルときたから、これはもう天国である。朝飯も大西洋(といっても、まだラ・プラタ河口の延長のようなもので、海は真茶色)が見えるベランダで喰い放題であった。

夕食はメインストリートのとあるレストランの歩道に並べられたテーブルで喰った。ピルゼンビールの看板があったので、cerveza uruguaya(ウルグアイ産のビール)を頼んだらやはりピルゼンが出てきた。ピルゼンが現地生産をしているらしい。ウェイターはビールを持ってきた序に uruguaya は【ウルグアージャ】ではなく【ウルグアーシャ】と発音するのだと教えてくれた。同じ南米のスペイン語でも国が変われば発音も変わるのだ。

翌朝、宿のオヤジはここには世界遺産があるから見て行けと教えてくれた。スペインからの征服者が作った石の砦と石敷の舗道、それを囲む古い建物などが旧港の近くにあり、ユネスコの認定碑も建てられていたが、世界遺産というには些かの代物であった。マア、世界遺産にもそれぞれの歴史と事情があるから、外国人がとやかく言うのは差し控えなければなるまい。

たった 1 晩だけのウルグアイ国に別れを告げて、再びフェリーでブエノスアイレスに戻った。メンドーサ行飛行機の出発まで時間があったので、昨年も散歩したサンマルティン広場や日本の銀座通りに当たるカリフォルニア通りをブラブラと歩き、久し振りにサシミでも喰うかと昼飯は日本食レストラン(寿司バー)に入った。結構なお値段であったが、サシミも天麩羅も漬け物も日本の味とは似て非なるものであった。毎日直行便で日本からの食材が届くニ



(コロニアの世界歴史遺産の城砦跡)

ニューヨークなどと違って、ここは地球の真裏であるから致し方なからう。

メンドーサでは、増田家農場特性の四阿アサードを御馳走になったり、セントロのレストラン、ラ・カソーナのダイニングショーに行ったりした。役者も前回と全く同じで、二人組のギタリストが演奏する「コンドルは飛んで行く」は、前回同様涙が出るほど素晴らしかった。



(コンドルは飛んでゆく)



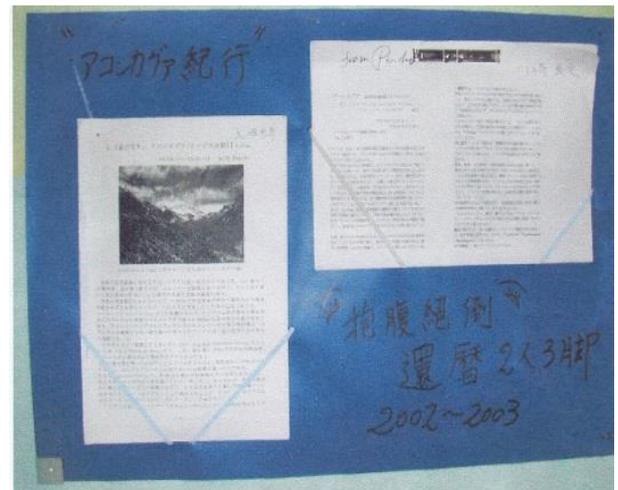
(メンドーサのバル)



(セントロ・メンドーサの街角2景)



(お世話になった増田ご夫妻とメンドーサの増田邸にて)



(お送りした前回の我々のアコンカグア紀行が民宿棟の掲示板に掲げられていた)

御主人の増田四郎さんは、この時から9年後の2013年にメンドーサで逝去された。メンドーサ在住54年とのことであった。2回に亘り大変お世話になりました。心からご冥福をお祈り申し上げます。また、増田家はこの農場を処分されて、現在はセントロ・メンドーサにお住まいである。(本稿 完)

[⇒「遙かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)